

## ダマスクス郊外の都市形成

——12—16世紀のサーリヒーヤ——

## 三 浦 徹

## I. は じ め に

## 1. サーリヒーヤ史のねらい

アイユーブ朝(564/1169—648/1250)・マムルーク朝(648/1250—922/1517)時代には、両朝の支配するエジプト・シリアにおいて、都市の発展が広くみられ、しかも先行する時代とは異なった形の都市の支配秩序が形成された。これについては、すでにラピダスの研究<sup>(1)</sup>があり、それによれば、軍事的・政治的支配者であるマムルーク(奴隸軍人)層は、マドラサ(学院)や隊商宿などの公共施設の建設を積極的に行い、都市の維持・発展に不可欠な存在であったこと、同時に出自からいえば異民族・異教徒である彼らマムルークの都市支配には、法学をはじめイスラム諸学の担い手であり民衆に対する幅広い影響力をもつウラマー層(学者・宗教指導者)の支持が必要であり、このようなマムルークとウラマーの相互協力が、都市の発展を支えた基本的要素であると分析している。

この時代は、ダマスクスについてみると、郊外の発展が顕著にすすんだ時期である。すなわち、ウマイヤ・モスク al-Jāmi' al-Umawīと城砦を中心とし東西1.5km 南北750mの市壁にとり囲まれた市内(旧市街)の外側の地域に、6/12世紀以降、新たな街区(地区)が次々と形成された<sup>(2)</sup>。本稿でとりあげるサーリヒーヤ al-Ṣālihiya もそのひとつで、市内から北西約2kmのカーサイユーン山 Jabal Qāsiyūn(カシオン山)の麓に、ヤズィード川 Nahr Yazīdとサウラー川 Nahr Thawrā(トゥラー川ともいう)に沿って街並がつくられていった(地図1—ダマスクスとその郊外参照)。726/1326年にダマスクスを訪れたイブン・バットゥータ Ibn Baṭṭūṭa は、このような郊外の発

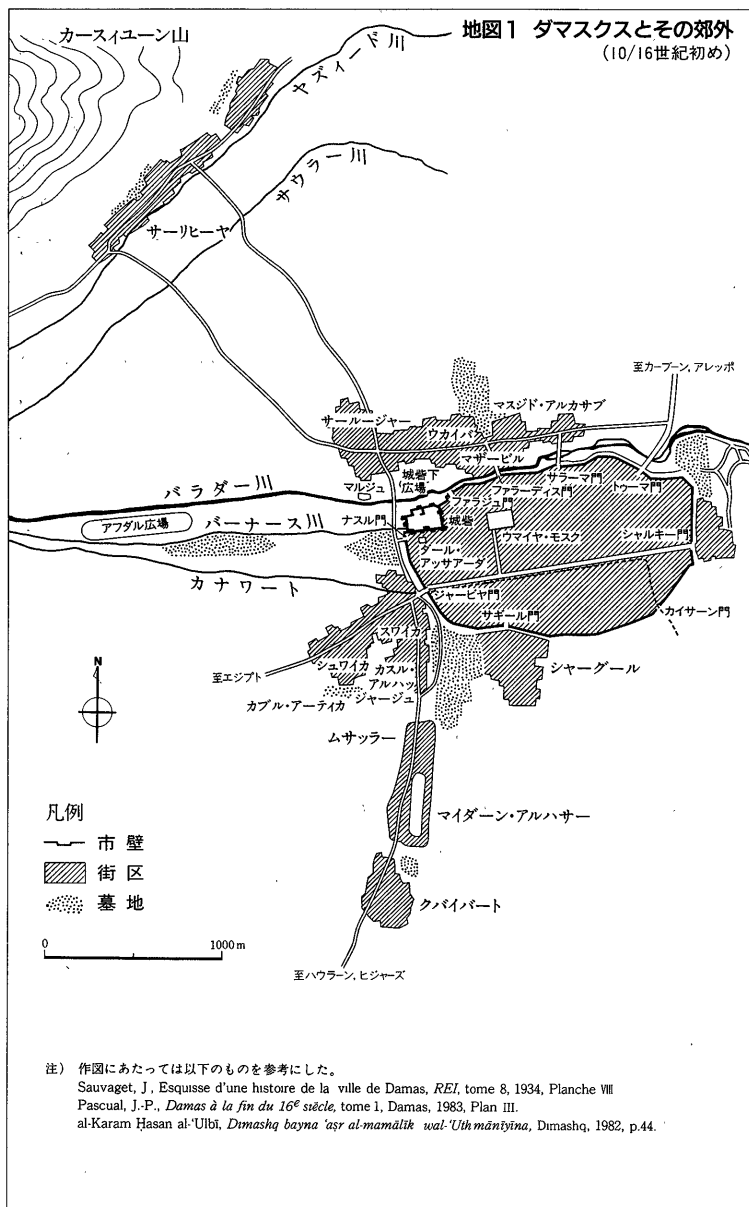
展について次のように述べている。

ダマスクスの周囲は、東方を除き広大な郊外〔の街区〕*rabaḍ*にぐるりと囲まれている。郊外〔の街区〕は、通りの狭いダマスクス市内と比べ、ずっと快適である。市の北郊にはサーリヒーヤ〔地区〕があり、それは、それ自体でひとつの大きな都市 *madīna* といえる。そこには、他に類をみないほどの大きなスーク(市場)があり、ジャーミー *masjid jāmi'*<sup>(3)</sup>や病院を備えている。また、イブン・ウマルのマドラサ<sup>(4)</sup>があり、それはコーランを学ぼうとする老若のために寄進されたもので、彼らやそこで教える人びとには、十分な食料と衣類が支給される。〔中略〕サーリヒーヤの住民は、皆イブン・ハンバルの学派 *madhhab*〔ハンバル派〕のもとにある<sup>(5)</sup>。

この記事から、マムルーク朝時代のダマスクスにおいては郊外が市内を凌ぐ発展を示し<sup>(6)</sup>、とりわけサーリヒーヤは「都市」とよばれるほどに成長していたことがわかる。また、同地の住民がスンナ派の四法学派のひとつハンバル派のもとにあったという言及は、サーリヒーヤの形成において同派のウラマーがこれに大きくかかわっていたことを窺わせる。では、このような発展の原動力はどこにあり、それはいかなる過程をたどったのであろうか。現在のところ、サーリヒーヤに限らず、アイユブ朝・マムルーク朝時代の都市の形成過程を具体的に扱った研究はほとんどなされていない<sup>(7)</sup>。本稿では、サーリヒーヤの形成の過程を具体的に明らかにし、それを通じて、ラビダスの提起した都市におけるマムルークとウラマーの相互協力という問題を、都市の形成過程に即して検討したいと考える。

## 2. 史料について

サーリヒーヤの歴史を明らかにするうえで基本となる史料は、同地出身のウラマーによる《サーリヒーヤの歴史》と題する以下の三つの著作である。第一は、マムルーク朝末期にイブン・アルミブラド *Yūsuf Ibn al-Mībrad*<sup>(8)</sup> (*Ibn 'Abd al-Hādī*ともよばれる、909/1503没)が著した《サーリヒーヤの歴史 *Ta'rikh al-Ṣāliḥiyya*》(以下 *al-*



Ṣāliḥiyya と略す) であるが、同書は現存しない。イブン・アルミブラ  
ドは、代々ハンバル派の学者であるアブド・アルハーディー一家に生  
まれ、その先祖はサーリヒーヤの形成に深くかかわるクダーマ家に  
連なっていた<sup>(9)</sup>。第二は、イブン・アルミブラドの弟子にあたるハナ  
フィー派のウラマー、イブン・トゥールーン Muḥammad Ibn  
Ṭūlūn<sup>(10)</sup> (953/1546 没) が著した《サーリヒーヤの歴史における珠玉  
の首飾り *al-Qalā'id al-jawhariyya fī ta'riḥ al-Ṣāliḥiyya*》<sup>(11)</sup> (以下  
*Qalā'id* と略す) である。同書は、サーリヒーヤの起源から筆をおこ  
し、同地のジャーミー、マドラサなどの宗教・社会施設とそこで活  
動したウラマーなどについて、先行する史書と自己の知見に基づき  
まとめたもので、現存するサーリヒーヤ史のもっともまとまった史  
料となっている。第三は、12/18 世紀にハンバル派のイブン・キンナ  
ーン Ibn Kinnān<sup>(12)</sup> (1153/1740 没) が、当時はまだ現存した *al-Ṣāliḥiyya*  
からの抜粋を中心にまとめた《〈サーリヒーヤの歴史〉の抜粋におけ  
る広大な絹の牧場 *al-Murūj al-sundusiyya al-fasiḥa fī talkhiṣ Ta'riḥ  
al-Ṣāliḥiyya*》(以下 *Murūj* と略す) で、現在は散佚した *al-Ṣāliḥiyya* の  
概要を伝えている<sup>(13)</sup>。本稿では *Qalā'id* を基本史料に、さらに以下  
の地誌、年代記、伝記集などを史料として用いた(見出しは略称を示  
す)。

#### *A'lāq*

Ibn Shaddād, *al-A'lāq al-khaṭira fī dhikr umarā' al-Shām  
wal-Jazīra*; Dimashq, Sāmī al-Dahhān ed., Dimashq, 1956;  
*Ḥalab*, D. Sourdel ed., Dimashq, 1953.

#### *Bidāya*

Ibn Kathīr, *al-Bidāya wal-nihāya*, 14 vols., Bayrūt, 1966.

#### *Dāris*

al-Nu'aymī, *al-Dāris fī ta'riḥ al-madāris*, Ja'far al-Ḥasani  
ed., 2 vols., Dimashq, 1948—51.

#### *Ibn Khallikān*

Ibn Khallikān, *Wafayāt al-a'yān wa anbā' abnā' al-zamān*,  
Iḥsān 'Abbās ed., 8 vols., Bayrūt, 1977—78.

*Ibn Rajab*

Ibn Rajab, *Kitāb al-dhayl 'alā Ṭabaqāt al-Ḥanābila*, Muḥammad Ḥāmid al-Faqqī ed., 2 vols., al-Qāhira, 1952—53.

*Kawākib*

Najm al-Dīn al-Ghazzī, *al-Kawākib al-sā'ira bi-a'yān al-mi'a al-āshira*, Jibrā'il Sulaymān Jabbūr ed., 3 vols., Bayrūt, Jūniya & Ḥarīṣā, 1945—59.

*Mufākaha*

Ibn Ṭūlūn, *Mufākaha al-khillān fi ḥawādith al-zamān*, Muḥammad Muṣṭafā ed., 2 vols., al-Qāhira, 1962—64.

*Murūj*

Ibn Kinnān, *al-Murūj al-sundusīya al-fasiḥa fī talkhīṣ Ta'riḥ al-Ṣāliḥīya*, Muḥammad Aḥmad Dahmān ed., Dimashq, 1947.

*Qalā'id*

Ibn Ṭūlūn, *al-Qalā'id al-jawhariya fī ta'riḥ al-Ṣāliḥīya*, Muḥammad Aḥmad Dahmān ed., 2 vols., Dimashq, 1949—56.

*al-Qalānisi*

Ibn al-Qalānisi, *Dhayl Ta'riḥ Dimashq*, H.F. Amedroz ed., Leyden, 1908.

*Riḥla Ibn Baṭṭūṭa*

Ibn Baṭṭūṭa, *Riḥla Ibn Baṭṭūṭa*, Bayrūt, n.d..

*Riḥla Ibn Jubayr*

Ibn Jubayr, *Riḥla Ibn Jubayr*, W. Wright & M.J. de Goeje ed., Leyden, 1907.

*Shadharāt*

Ibn al-'Imād, *Shadharāt al-dhahab fī akhbār man dhahaba*, 8 vols., Bayrūt, n.d..

*Thimār*

Ibn al-Mibrad, *Thimār al-maqāṣid fī dhikr al-masājid*, Muḥammad As'ad Ṭalas ed., Bayrūt, 1943.

*Yāqūt*

## II. サーリヒーヤへの移住

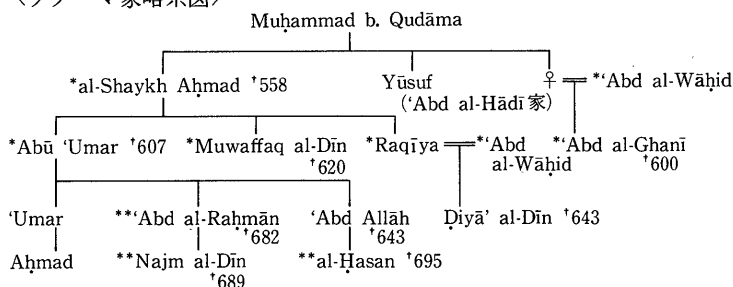
### 1. 起源と名称の由来

*Qalā'id* によれば、サーリヒーヤの起源は、6/11世紀中頃にパレスティナから十字軍の支配を逃れダマスクスに移住したハンバル派のウラマー、クダーマ家 Banū Qudāma が、同地に移り住みその建設を始めたことにより、またその名称は同家がダマスクスに移住した当初寄寓していたアブー・サーリフ・モスク Masjid Abi Šālīḥ にちなむという<sup>(14)</sup>。サーリヒーヤは、その起源において、市内の飽和に従って旧市街の周縁部に自然に拡張・形成されたシャーグール al-Shāghūr などの地区とは異なった事情を有しており、サーリヒーヤの形成の性格を明らかにするためには、クダーマ家のパレスティナからの移住に遡って検討しなければならない。

### 2. パレスティナからの移住

492/1099年にイェルサレムを攻略した十字軍勢力は、パレスティナ海岸部を支配下におき、シリア内陸部へと侵攻を続けた。当時クダーマ家は、ナーブルス近郊のジャンマーイール Jammā'il<sup>(15)</sup>村に住み、同地の状況と移住の経過については、Ḍiyā' al-Dīn Muḥammad<sup>(16)</sup> (643/1245没) が移住に加わっていた父や母から聞いた話を詳しく伝えている。それによれば、ジャンマーイール村は、当時イブン・バーリザーン Ibn Bārīzān<sup>(17)</sup>王の支配下にあり、彼はムスリムから他所より高い人頭税をとり体罰を課するという暴政をしいた。さらにクダーマ家のシャイフ・アフマド Aḥmad b. Muḥammad b. Qudāma (558/1162・3没) に対しては、彼が行う金曜日の集団礼拝の説教(フトバ)に近隣の村を含め多くの人びとが集まるため農作業の妨げとなっているとの非難が加えられ、身の危険を察知した彼は、ダマスクスへの移住を決意し、551年7月/1156年8・9月に近親者3人とともに同地へ旅立った。10月には、子のアブー・ウ

〈クデーマ家略系図〉



\* = ジャンマーイルからの移住者

\*\* = ハンバル派大カーディー

マル Abū 'Umar Muḥammad<sup>(18)</sup> (607/1210 没) をはじめ村に残っていたクデーマ家の者にも移住がよびかけられ、同月35名がダマスクスに到着した。移住者計39名のうち、クデーマ家は親族関係のはっきりわかる者だけで22名を数え、移住が一族総ぐるみで行われたことがわかる<sup>(19)</sup>(クデーマ家略系図参照)。また、クデーマ家の移住の決意を知った村人たちはその慰留につとめており<sup>(20)</sup>、クデーマ家の移住は、ジャンマーイル全体の状況というより、「十字軍 Firanj の支配の下で信仰の表明ができなくなることを怖れた<sup>(21)</sup>」シャイフ・アフマドらクデーマ家の宗教的理由が大きく働いていたとみられる。

ダマスクス移住はその後も続き、翌552年には12名が、以後名前が知られている者だけでも104名の移住が行われた<sup>(22)</sup>。そこには、クデーマ家のほか、ジャンマーイル村以外の出身者が35名含まれ(ナールプスの6名、シャイフ・アフマドの妻の出身地マルダー Mardā の12名など)、クデーマ家の移住に触発され、近郊の村などからも同調者がでてきたとみられる。

クデーマ家の移住が、異教徒の支配するジャンマーイルからの脱出だったことは明らかであるが、移住先として遠隔のダマスクス選ばれた理由はどこにあるのだろうか。移住当時のダマスクスは、549年2月/1154年4月にザンギー朝のヌール・アッディーンがダマスクスに入城し、ブーリー朝 (497/1104—549/1154) の支配に終止符を打った<sup>(23)</sup>直後の時期にあたっていた。末期のブーリー朝はもはや自らの力では市を防衛することは不可能な状態にあり、543年3月/

1148年7月にはダマスクス近郊のミッザ al-Mizza 村まで5万の十字軍が迫り、市民の義勇軍や各地の援軍をえてようやくこれを防ぐことができた<sup>(24)</sup>。他方ヌール・アッディーンは、十字軍に対して積極的な派兵を行いこれをダマスクスの南西ハウラーン地方に押し止どめつつ、ダマスクス入城を狙い、549年に入城を果たすと、飢餓と物価高と十字軍とに怯えていた市民はこれを歓迎したという<sup>(25)</sup>。ヌール・アッディーンの入城によって、ダマスクスは政治的安定を回復し、以後軍事的にも政治的にも、ヌール・アッディーンの十字軍に対するジハード（聖戦）の拠点となる。このような推移をみるならば、シャイフ・アフマドラクダーマ家一行は、自らを追うものとなった十字軍勢力と対抗するダマスクスのヌール・アッディーンの下に、積極的に身を寄せたといえるであろう。

### 3. ダマスクスにおけるクダーマ家

ダマスクスに到着したクダーマ家の一行が逗留したのは、市の東の入口シャルキー門の外側にあるアブー・サーリフ・モスクであった<sup>(26)</sup>。当時同モスクは、ハンバル派のハンバリ一家 Bayt al-Hanbali が握っており<sup>(27)</sup>、クダーマ家がここに寄寓することになる経緯については、ハンバリ一家のアブー・アルファラジュ Abū al-Faraj Ibn al-Hanbali なる人物の言として「私の父が彼らをアブー・サーリフ・モスクに住まわせた」と記されている<sup>(28)</sup>。ハンバリ一家は、その祖 ‘Abd al-Wāḥid al-Shirāzī (486/1093没) がバグダードからシリアに移り、イェルサレムやダマスクスにハンバル派を弘めて以来<sup>(29)</sup>、三代にわたりダマスクスの同派の長 ra’īs, shaykh をつとめる<sup>(30)</sup>指導的地位にあった。クダーマ家とは、‘Abd al-Wāḥid の時代に関係が生まれ、彼はイェルサレムからクダーマ家のいる地方を訪れた際に、同家の祖 Qudāma にコーランの暗誦を手ほどきした<sup>(31)</sup>。このような両家の師弟関係は移住の頃にも続いていたとみられ、シャイフ・アフマドの子アブー・ウマルとムワッフアク・アッディーン Muwaḥḥaq al-Dīn ‘Abd Allāh<sup>(32)</sup> (620/1223没) の兄弟は、解決困難な問題が生じるとハンバリ一家の Najm al-Dīn (‘Abd al-Wāḥid の孫, 586/



1190没)を訪ねたという<sup>(33)</sup>。クダーマ家をアブー・サーリフ・モスクに住まわせた「アブー・アルファラジュの父」とはこの Najm al-Din を指すとみられ<sup>(34)</sup>、以上のような両家の関係を考えるならば、ダマスクスに逃れてきたクダーマ家を自家のモスクに迎えるのはハンバル派の指導者としては当然であり、彼らは当時のダマスクスにおいて少数派の位置にあったハンバル派にとっては力強い味方でもあった。クダーマ家のダマスクス移住は、このようなハンバル派の絆に支えられていたといえよう。

アブー・サーリフ・モスクに居を定めたシャイフ・アフマドは、モスクで礼拝の指導を行い、やがて彼のもとへ人びとが参集し、市民から差入れも届くようになった<sup>(35)</sup>。その反面難題も生じ、第一は、病死者が続出しその数は40名近く（移住者150名の約1/4）にものぼった<sup>(36)</sup>。第二は、シャイフ・アフマドの支持者が増えていくことに對し、ハンバリー家が、同家のもつモスクのワクフ（寄進財）の権利を奪われてしまうのではないかと警戒し、対立が生じたことである。ハンバリー家は、クダーマ家に対し服従を要求し、シャイフ・アフマドがこれに従わないのをみて、ヌール・アッディーンに訴えた。しかしヌール・アッディーンは、ハンバリー家の意に反して、アブー・サーリフ・モスクとそのワクフをクダーマ家に譲渡するとの裁定を下した<sup>(37)</sup>。

こうして移住者たちは、正式に自分たちの住み家と資産を手に入れることができたが、ここを永住の地とすることはできなかった。それは、先に挙げた病死者が増大しつづけたためと、シャルキー門近辺の住民が門の外に出てきては酒を飲み、これを認めないクダーマ家との間に不和が生じたためである。そこでクダーマ家一行は、北郊のカースイユーン山の修道院へ移り住むこととなった<sup>(38)</sup>。

#### 4. カースイユーン山への移住

移住前のカースイユーン山は、二つの修道院と一つのモスクを除き建物はほとんどなく、わずかの人が住むだけであったという<sup>(39)</sup>。むしろ同地は、アブラハムをはじめイスラム以前からの諸預言者に

結びついた伝説と遺跡の地、あるいは聖人の墓地として知られ<sup>(40)</sup>、とくに山の中腹にある〈血の洞窟 Maghāra al-Dam〉は、聖書にいうカインがアベルを殺害した場所とされ、人びとが旱魃や物価高に襲われたときにアッラーへの祈願（ドゥアー）を行う場となっていた<sup>(41)</sup>。このようにダマスクス市民にとってカーシユーン山は、巡礼・参詣の地、「聖なる山」<sup>(42)</sup>であった。

クダーマ家がここを移住地として選んだ事情は、第一に、モスクでの死者を葬るために同山を訪れたシャイフ・アフマドが、山の住人から移住地として〈ハンバル派の修道院 Dayr al-Hanābila〉の存在を教えられたこと<sup>(43)</sup>、第二に、「アブー・アルファラジュの父」すなわちハンバリ一家の Najm al-Dīn が病死者に悩むクダーマ家に、同山への移住を助言したこと<sup>(44)</sup>である。Najm al-Dīn の父は、同修道院に関係をもっていたこと<sup>(45)</sup>から、彼の助言は具体的にこの修道院への移住を勧めたものとみられる。

カーシユーン山への再移住を決意したクダーマ家は、修道院の改装に着手した<sup>(46)</sup>。同所への移住の時期については諸説があるが、最も早いものではダマスクス移住2年後の553年には開始されていたとする<sup>(47)</sup>。移住当初は、修道院に石の門がなく盗賊や狼を怖れながら夜をすごす有様であった<sup>(48)</sup>が、やがてシャイフ・アフマドのもとに山の住民が訪れるようになり、またヌール・アッディーンも彼を訪ね、その要請に応じて修道院の隣りの古モスクの修築を行った<sup>(49)</sup>。他方、当時山の土地を手にしそこを耕していた人びとは、クダーマ家の一族が増え山の土地を握ることになることを怖れたという<sup>(50)</sup>。クダーマ家の移住は、先のアブー・サーリフ・モスクでの例のように、先住者の既得権を侵すおそれがあったが、これが具体的な紛争へと至らなかったのは、当時のカーシユーン山全体が、未開のフロンティアであったためと思われる。

クダーマ家の二度の移住を通じて、シャイフ・アフマドの指導力が大きな役割を果たしていたことは明らかである。彼は、故郷ジャンマーイーールでも、アブー・サーリフ・モスクでも、サーリヒーヤでも、瞬く間に人びとの信望をうることに成功しており、「当代の預

言者<sup>(51)</sup>」とまで評されている。そして第二の移住地に選ばれたカー  
スイユーン山は、一方で人のほとんど住まない未開の地であると同  
時に、サウラー川とヤズィード川の二つの河川が流れるという自然  
条件にも恵まれていた。この二つは、いずれも移住には最適の条件  
として作用した。未開の地、聖なる地としてのカースイユーン山の  
イメージは、ダマスクスの市民の居住を遠ざけるものとはなっても、  
聖地パレスティナを追われ新天地を求めるクダーマ家にとっては、  
諸預言者の足跡のしるされたカースイユーン山のもつ宗教性は、む  
しろプラスのものとして考えうるものであった。さらに同地への移  
住は、ハンバリ一家との対立を解消するという現実的意味をもって  
おり、これらがあいまってサーリヒーヤの建設の端初が開かれるこ  
ととなった。そして、十字軍によってパレスティナを追われたクダ  
ーマ家の移住という出来事は、新たにカースイユーン山の宗教性を  
増すこととなり、後世、同山のアブー・ウマルの墓は靈験あらたか  
な参詣 ziyāra の地となり<sup>(52)</sup>、サーリヒーヤは「ヒジュラ（聖遷）」の  
地として語りつがれることになるのである<sup>(53)</sup>。

### III. サーリヒーヤの形成

#### 1. 宗教・社会施設の発展

サーリヒーヤに街区としての基盤が築かれたのは、シャイフ・ア  
フマドの子アブー・ウマルの時代であり、彼は同地にムザッファリ  
ー・ジャーミー al-Jāmi' al-Muẓaffarī とウマリーヤ学院 al-  
Madrasa al-'Umariya を建設した。同ジャーミーが、ハンバル派の  
修道院の北に建設されたのは、アイユブ朝時代に入った598/1201・  
2年のことである。これについて *Bidāya* は次のように記してい  
る<sup>(54)</sup>。

この年(598年)、アブー・ウマルは、カースイユーン山の麓にジ  
ャーミーの建設を始めた。これには、Abū Dā'ūd Maḥāsīn なる  
者が協力したが、彼は建物の高さが身の丈に達するまでに財を  
使い果たしてしまった。そこでイルビルの支配者ムザッファル  
al-Malik al-Muẓaffar Kūkubūrī<sup>(55)</sup>がその完成のために莫大な

金を送り、またバラダー川から水をひくために1000ディーナールを送った。〔しかし〕ダマスクスの支配者ムアッザム al-Malik al-Mu‘azzam はそれ〔バラダー川からの取水〕を許さず、それがムスリムの墓を覆ってしまうことになるからと弁明した。〔ムアッザムはかわりに〕井戸をつくり、〔水車を〕回すらばを置き、そのための寄進（ワクフ）を行った。

ムザッファリー・ジャーミーの建設は、アブー・ウマルやクデーマ家の力では賄いきれないほどの莫大な資金を必要とし、建設に最初に協力した Abū Dā‘ūd は商人 tājir であったという<sup>(56)</sup>。またダマスクスを遠く離れたジャズイーラ地方のイルビルの支配者ムザッファル (630/1233没) が出資することになる事情については、A‘lāq に次のように記されている。

ムザッファルに次のような話が伝えられた。ダマスクスのハンバル派の者たちがカースイューン山の麓にジャーミーの建設を始めたが、彼らの力だけでは建設することができなかった。そこで〔ムザッファルは〕これを完成するために、彼のハージブ〔侍従〕の一人に3000ディーナール余をもたせて送りだした<sup>(57)</sup>。

これによれば、ムザッファリー・ジャーミーの建設は、ダマスクスのハンバル派による運動の一環と考えられ、ムザッファルは彼らの希望を叶え運動を後押ししたことがわかる。遠隔の地にいたムザッファルにサーリヒーヤの動向が伝えられたのは、単なる風聞ではなく直接援助の要請があったとみるべきであり、そこには、ハンバリ一家の娘でムザッファルの妻 Rabi‘a Khātūn に仕えていたアーリマ al-‘Ālima bint al-Nāṣiḥ<sup>(58)</sup> (653/1255・6没) が仲介役を果たしていたと考えられる。

ジャーミーが完成すると、アブー・ウマルが集団礼拝の説教を行う初代のハティーブとなった<sup>(59)</sup>。サーリヒーヤに独自のジャーミーが建設されたことは、7/13世紀初めのこの時期には、同地の住民が地区としてのまとまりをもつようになっていたことを示している。また代々のハティーブ職はハンバル派の者が占め<sup>(60)</sup>、さらに「ハンバル派のジャーミー Jāmi‘ al-Ḥanābila」の名でもよばれた<sup>(61)</sup>よう

に、同ジャーミーはハンバル派の拠点として利用された。

同時期にマドラサの建設も始まり、アブー・ウマルはハンバル派の修道院の東にウマリーヤ学院を建設した<sup>(62)</sup>。同学院の正確な建設年は不明であるが、イブン・アルミブラドは、「ムザッファリー・ジャーミーがサーリヒーヤの最初の建築物で、ウマリーヤ学院がこれに続いた<sup>(63)</sup>」と述べている。以後このような建設事業が急速に活発化し、マムルーク朝時代末までには、最盛期の人口は5,000人を越え<sup>(64)</sup>、30を越える小街区 *hāra, mahalla* が形成された<sup>(65)</sup>。イブン・トゥールーンが *Qalā'id* にその名を挙げて紹介している建築施設の数を集計すると、以下のようになる<sup>(66)</sup>。

ジャーミー	7	マドラサ	18
ハディース学院 <i>dār al-ḥadīth</i>	6	コーラン学院 <i>dār al-qur'ān</i>	2
モスク	74	ハーンカー	5
ザーウィヤ	28	リバート	16
墓 <i>turba</i>	65	廟 <i>qubba</i>	7
病院 <i>māristān</i>	2	塔 <i>ma'dhana</i>	24
公衆浴場 <i>ḥammām</i>	(3)	井戸 <i>bi'r</i>	37

これらの施設は、一般にワクフ *waqf* とよばれる宗教的寄進行為に基づいて建築されたもので、寄進されたワクフ財(主としてスークや果樹園などの不動産)からの収入を運営費用に充てる点が特徴である。したがってこれらの施設の建設は、新興のサーリヒーヤにおいては、同地区の経済的基盤の開発・整備と結びつけて進められることになったとみられる。たとえば、ディヤーイーヤ・ハディース学院は、サーリヒーヤ最大といわれる *Sūq al-Fawqānī* (*Sūq al-Fawākiha*)の商店の大部分をワクフとしていた<sup>(67)</sup>。また、サーリヒーヤの小街区の多くはマドラサの名をもって呼ばれ、マドラサを核として形成されていることから<sup>(68)</sup>、サーリヒーヤにおいては、とくにマドラサの建設が発展の原動力となっていたことがわかる。そこで本稿では、マドラサの建設に焦点をあて、そこからサーリヒーヤの形成の過程とその特徴を明らかにしていくことにしたい。

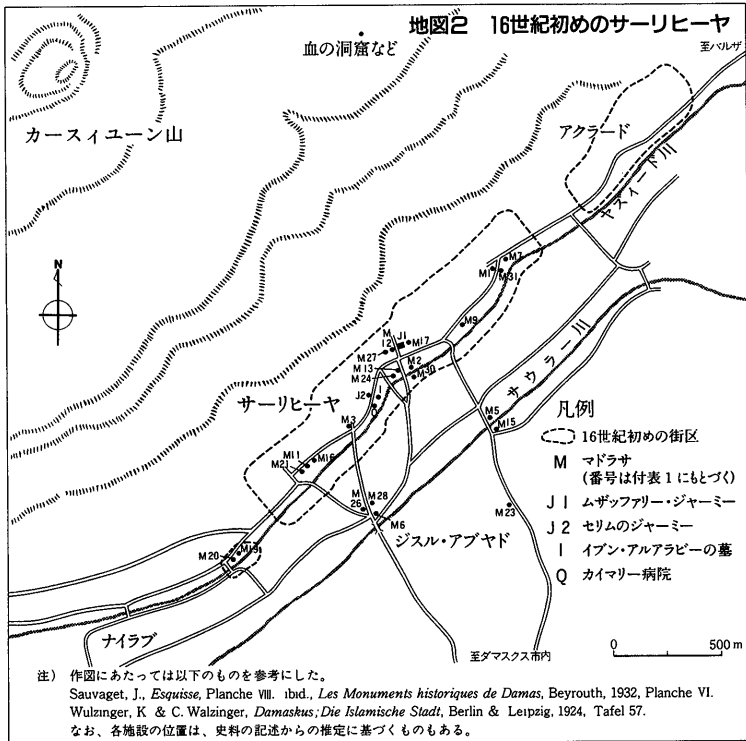
## 2. サーリヒーヤのマドラサ

マドラサは、コーランの暗誦などの初等教育を終えた者が学ぶ高等教育機関であり、バグダードにニザーミーヤ学院が設立(459/1067年)されて以降、これをモデルとしてイラン、イラク、シリア、エジプトに急速に広まった。ジャーミーヤモスクも古くからイスラム諸学の教育の場となっていたが、これらに対しマドラサの特徴は、第一に法学教育に主眼がおかれ、特定の法学派(具体的にはシャーフイー派、ハナフィー派、マーリク派、ハンバル派のスナ派四法学派のいずれか)を定めて設立されたこと、第二に、教授には給与が、また学生には奨学金や宿舍が支給されたことである<sup>(69)</sup>。これによって、マドラサは、法学派を中心に学問とウラマーの制度化・職業化をおしすすめる役割を果たし、政治支配者たるマムルーク層にとっては、マドラサの建設と各法学派の長に当る大カーディー *qaḍī al-quḍāt* の任命を通じて、ウラマーと法学派をコントロールする道が開かれたことが、歴史的にみて重要となる<sup>(70)</sup>。

マムルーク朝末期までにサーリヒーヤに建設されたマドラサ(ハディース学院、コーラン学院とよばれるものも含む<sup>(71)</sup>)の数は計31である<sup>(72)</sup>。同時代のダマスカス全体のマドラサの数は *Dāris* をもとにすれば159であり、サーリヒーヤはその19.5%を占めていたことになる。イブン・トゥールーンは、これらのマドラサについて、その起源と創設者、歴代の教授とその経歴、建物の現状を詳しく述べている。これをもとに、サーリヒーヤのマドラサを建設年代順に配列し、創設者、法学派、歴代教授数を〈付表1 サーリヒーヤのマドラサ〉にまとめ、またその位置が確認できるものは、〈地図2 16世紀初めのサーリヒーヤ〉に記した。以下、サーリヒーヤのマドラサの全体的な傾向と特徴について、建設年代、創設者、法学派の順に、ダマスカス全体の傾向と比較しつつ検討していくことにしよう。

### ① 建設年代

マドラサの建設年は、その記述のなかで明示されていない場合も多く、その際は創設者の没年などを下限として用いた。これを50年ずつ区切って集計し、付表2にまとめた。



サーリヒーヤのマドラサの建設年代については、601—650年の50年間にその半数以上(16件)が集中している。さらに、アイユーブ朝のダマスカス支配時代(570/1174—658/1260)で区切ってみると、この時代に全体の67.7%を占める21のマドラサが建設されている。これをダマスカス全体の傾向と比べてみよう。ラビダスによれば、マムルーク朝時代のマドラサの建設数は63、アイユーブ朝支配時代の建設数は他の資料から52と推計され<sup>(73)</sup>、その構成比は45.2%となる。サーリヒーヤの場合は、ダマスカス全体に比べてもアイユーブ朝時代に高い集中を示し、しかも、マムルーク朝時代に入ると急激な減少を示している。

## ② 創設者

マドラサの創設者を、社会階層によって分けて集計したものが付表3である。ダマスクス全体(但しマムルーク朝時代のみを対象)では、アミールなど支配階層であるマムルーク層が全体の42.9%を占め、ウラマー層17.5%、商人層22.2%とともに三本の柱となっている。これに対しサーリヒーヤでは、マムルーク層(集計上アイユーブ家のマリク及びその親族を含む)が58.1%(18件)、ウラマー層が16.1%(5件)であり、ダマスクス全体と同様、マムルーク層への依存度が高い。クデーマ家の移住に始まるサーリヒーヤの建設には、支配階層たるマムルーク層の経済力が不可欠であったこと、なかでもマリク(アイユーブ家の王)とその親族が全体の約1/3(9件)を占め、その協力が大きな力となっていたことがわかる。

## ③ 法学派(マズハブ)

*Qalā'id* と *Dāris* の両書のマドラサの章は、いずれも法学派別の編成になっており、当時のウラマーにとってどのマドラサがどの法学派に属するかは自明のものであったとみられる。本稿では、両書で学派を明示していないハディース学院・コーラン学院についても教授等の構成から可能な限り所属する法学派を判断し、法学派ごとにその数を集計して付表4にまとめた。

ダマスクスのマドラサの構成は、シャーフィイー派とハナフィイー派の両派が支配的で、それぞれ30~40%を占め、ハンバル派は10%前後にすぎなかった。このような傾向はカイロやアレップでも同様で<sup>(74)</sup>、両派が優越した原因は、一般にシャーフィイー派がクルド系アイユーブ朝に、ハナフィイー派がトルコ系マムルークに、その支持を見出したことに求められている<sup>(75)</sup>。

サーリヒーヤについてみるならば、ハナフィイー派が50%を越え(16件)、ハンバル派がこれについて25.8%(8件)を占めている。他方、ダマスクス全体では最も優勢であったシャーフィイー派は、12.9%(4件)にとどまり、大きな違いをみせている。

むろんマドラサには規模の大小があり、その数だけで各派の実勢



を判断することはできない。そこで *Qalā'id* らの史料に名を挙げられた歴代教授の数を法学派別に集計したのが付表5である。これによれば、教授数についてみても、ハナフィー派が半数近くを数え、ハンバル派は1/4前後を占める。他方、マドラサ数で劣るシャーフィイー派は、教授数ではハンバル派と肩を並べる結果となっている。

サーリヒーヤは、ハンバル派のクダーマ家の移住に始まり、イブン・バットゥータは前述のように、その住民はハンバル派のもとにあると述べた。しかし、マドラサや教授数でみる限り、決してハンバル派が絶対的な勢力をもっていたとはみられず、むしろハナフィー派が優勢であった。では、何故ハナフィー派が、サーリヒーヤの形成に最初からかかわっていたハンバル派や市内で優勢なシャーフィイー派をしのぐ勢力となりえたのであろうか。次にこの問題を、ハンバル派の基盤と比較しつつ論じることにはしたい。

### 3. ハナフィー派とハンバル派

ハナフィー派のマドラサの特徴は、その創設者に、マルムークなどの支配階層、なかでもアイユーブ家の者が多いことである。ハナフィー派の16のマドラサの創設者の構成は、アイユーブ家のマリク（王）とその親族 5、アミール 8、その他不明 3であり、アイユーブ家の者が約1/3を占めている。また、アイユーブ家の者がサーリヒーヤに建設したマドラサの法学派別の内訳は、ハナフィー派 5、ハンバル派 2、シャーフィイー派 1、不明 1となり、サーリヒーヤに関していえば、本来シャーフィイー派支持とされるアイユーブ家が、ハナフィー派支持のようにすらみえる。

同家のハナフィー派のマドラサの創設者を具体的にみていくと、うち3人は、ダマスクスの支配者ムアッザム al-Mu'azzam(在位615/1218—624/1227) 及びその妻と娘 ('Aziza と Khadija) である。ムアッザムは、アイユーブ家の他の者がシャーフィイー派であるのに対し唯一人ハナフィー派に属し、しかも自身が熱心な学徒であった。父アーディルは「何故家 ahl に叛くのか」と言ってこれを咎めることもあったが、ムアッザムは同派への肩入れをつづけ、やがてその子供

たちも彼に従ったという<sup>(76)</sup>。彼がサーリヒーヤに建設したムアッザミーヤ学院 al-Madrasa al-Mu‘aẓẓamiya<sup>(77)</sup>は、歴代教授にハナフィー派のカーディーを多数擁し、同派の有力なマドラサとなった。ムアッザムの弟でハナフィー派のアズィーズィーヤ学院を建設した al-‘Azīz ‘Uthmān (630/1233没) は、兄に従順な人物といわれ<sup>(78)</sup>、同学院の建設にはムアッザムの影響があったとみてよいであろう。また同じく兄弟の al-Qāhir Ishāq もハナフィー派のカーヒリーヤ学院を建設し、ここにはムアッザムの妻子の墓が設けられた<sup>(79)</sup>。このように、サーリヒーヤのハナフィー派とアイユーブ家の関係は、ムアッザムに集中し、彼がサーリヒーヤにハナフィー派の核をつくりだしたといっていよいだろう。

次に、ハンバル派の8つのマドラサの創設者を分類してみると、ウラマー 5, アイユーブ家 2, 不明 1となる。まず、同派のウラマー自身による建設が多いこと、第二に、アイユーブ家による場合でも、たとえばサーヒバ学院は, Rabī‘a Khātūn (サラディンの妹, 643/1243・4没) に仕えるアーリマが、自分の父 al-Nāṣiḥ (ハンバリ一家) とハンバル派のためにマドラサを建設するよう進言してきたものであり<sup>(80)</sup>、ハンバル派自身の働きかけによるものとみられる。反面、同派は自らの積極的な運動なしにマムルーク層に支持を見出すことはできない状態にあったといえよう。ダマスカス全体のハンバル派のマドラサ(計11)にも同じ傾向がみられ、ウラマー 7, 商人 1, アイユーブ家 1, 不明 2の構成となっている<sup>(81)</sup>。

ハンバル派のマドラサの建設は、マムルーク層に依存したハナフィー派とは対照的に、何よりも自身の運動を基盤として進められた。このことは、ダマスカスにおける同派の活動の性格の反映とみられる。ハンバル派の中心はそもそもはバグダードにあり、5/11世紀以降降政治的混乱を強めた同地にかわり、新たな拠点と目されたのがダマスカスであった<sup>(82)</sup>。その先駆が、バグダードから来て初めてシリアにハンバル派を弘布したハンバリ一家の ‘Abd al-Wāḥid で、その子 ‘Abd al-Wahhāb (536/1141没) は、ダマスカス初のハンバル派のマドラサであるシャリーフィーヤ学院 al-Madrasa al-Sharīfiya (ハ

ンバリー学院ともいう)を建設した<sup>(83)</sup>。また同派第二のマドラサ、ミスマリーヤ学院 al-Madrasa al-Mismāriya の教授を代々つとめたムナッジャー家 Banū al-Munajjā は、サドリヤ学院を建設するなど<sup>(84)</sup>ハンバリー家と並ぶハンバル派の中核的存在となった。これらに次いで、第三の勢力となったのがクデーマ家である。

このようなハンバル派の進展に対しては、他派からの干渉もみられた。たとえば、シャリーフィーヤ学院の建設(536年以前)に際しては、反対者が「この町の民衆‘amma はシャリーフィー派であり、ハンバル派のマドラサを建てることは、争い fitna や大きな被害をひきおこすことになる」と為政者に訴え、一時建設は差止められた<sup>(85)</sup>。また、クデーマ家の‘Abd al-Ghani (600/1203没)は、他の三派の者によってハンバル派の信条を攻撃され、ダマスクス退去を余儀なくされた<sup>(86)</sup>。このような他派からの攻撃にもかかわらず、集団としてのハンバル派はさらに強化され、617/1220・1年には、ムアッザムによってウマイヤ・モスクにハンバル派独自の礼拝用のミフラーブ(メッカの方角を示す壁龕)をもつことを許された<sup>(87)</sup>。内部的にも一定のまとまりがあったとみられ、‘Abd al-Wahid 以後、ライスないしシャイフとよばれる派の長が存在し、ハンバリー家、クデーマ家、ムナッジャー家の者がこれを占めていた<sup>(88)</sup>。

ダマスクスのハンバル派は、ハンバリー家やクデーマ家のように外来者の移入が大きな力となり、彼らの活動は、新参者であるがゆえに家を核とした運動という形ですすめられた。サーリヒーヤへの移住が始まった6/12世紀中頃は、ハンバル派のマドラサがつくられ同派の活動の基盤ができつつあった時期であり、サーリヒーヤの建設と同派の伸長は軌を一にしていたことがわかる。サーリヒーヤのムザッファリー・ジャーミーの建設がハンバル派の運動としてすすめられ、クデーマ家がウマリーヤ学院とディヤーイーヤ・ハディース学院<sup>(89)</sup>を建設し、ハンバリー家がアーリマ・ハディース学院<sup>(90)</sup>とサーヒバ学院の建設に寄与したように、サーリヒーヤの建設は、ハンバル派全体の基盤づくり・拠点づくりとしての意味をもっていた。この点で注目されることは、当初は市のサギール門(南門)近くにあ

ったハンバリ一家の墓所が、Najm al-Dīn (586/1190没)の代以降カースイューン山に移っていることである<sup>(91)</sup>。移動の具体的な理由を知ることはできないが、ハンバリ一家がサーリヒーヤの建設後、自家の中心をそこに移していったとみることもできるであろう。

#### 4. 政治支配者との結びつき

サーリヒーヤのマドラサの建設において、ハナフィー派はもちろんのこと、自身で積極的な建設運動をすすめたハンバル派の場合にも、アイユーブ家のような政治支配者のバックアップは不可欠であった。これに対し、彼ら政治支配者がサーリヒーヤにおいてマドラサなどの建設をすすめた理由はどこにあったのであろうか。この問題について、ここではとりあえず、ムザッファリー・ジャーミー、ハナフィー派のムアッザミーヤ学院、ハンバル派のアシュラフィーヤ・ハディース学院の三つの創設にそれぞれかかわった、ムザッファル、ムアッザム、アシュラフの三人の支配者に焦点をあて、彼らとサーリヒーヤの結びつきについて検討をすすめることにしよう。

前記の三者は、いずれもアイユーブ朝時代の地方支配者 *ṣāhib* であり、主としてムザッファルはイルビルを（在位586/1191—630/1233）<sup>(92)</sup>、ムアッザムはダマスカスを（在位615/1218—624/1227）<sup>(93)</sup>、アシュラフはムアッザム没後のダマスカスを（在位626/1229—635/1237）<sup>(94)</sup>統治した。三者の統治した期間は、スルターン・アーディル（在位596/1200—615/1218）没後のアイユーブ家の内部抗争期に当り、ムアッザムは兄のエジプトのスルターン・カーミル（在位615/1218—635/1238）と対立し、同じく兄のアシュラフはカーミル側に、ムザッファルはムアッザム側につくことが多かった<sup>(95)</sup>。しかしこのような政治的関係とは別に、三者の統治には共通した傾向がみられ、それは、マドラサなどの宗教施設の建設を積極的にすすめ、ウラマーを保護したことである。

ここで注意すべきことは、三者は自ら学芸活動にたずさわり、宗教的敬虔さを持ち、学芸に対する保護も為政者としての政策的立場より以前に、自分自身の関心からでていたとみられることである。

ムアッザムを例にとれば、自らハナフィー派の学徒としてよくこれを修め、金曜日ごとに父アーディルと伯父サラディンの墓に詣で、自身の死に際しては白布で遺体を包み砂漠に埋め決して墓の上に何も建てぬようにと遺言するほどであった。またハンバル派の祖イブン・ハンバルのハディース集《*al-Musnad*》を学び、その編纂を命じたように<sup>(96)</sup>、預言者ムハンマドの言行を伝えるハディースに関心をもっていたこともムアッザムの宗教心のあり方を示すものといえよう。このハディースの重視は、三者に共通してみられる傾向で、ムザッファルはとくにハディース学者を厚遇し<sup>(97)</sup>、アシュラフはハディースを愛好しダマスクスに二つのハディース学院を建設した<sup>(98)</sup>。ムザッファルがハンバル派のジャーミーの、ムアッザムが同派のウマイヤ・モスクのミフラーブの<sup>(99)</sup>、アシュラフが同派のアシュラフィーヤ・ハディース学院<sup>(100)</sup>の建設に寄与したように、三者がハンバル派に保護を与えたのは、同派がハディースを重んじるなど彼らの宗教的関心に応えるものをもっていたためとみることができであろう。また、コーランとハディースだけを拠り所とし宗教的敬虔を強調するハンバル派の信条は、原理的であるがゆえに法学派の枠をこえた幅広い共感をよんでいたといえることができるであろう。

以上のように、三者の学芸に対する保護は自身の宗教的関心から発するものであり、このことがまず彼らをハンバル派やサーリヒーヤに近づけたといえるであろう。では、このような宗教やウラマーへの接近は、政治的にはどのような意味をもっていたのであろうか。この点に関してハンフリーズは、ムアッザムの宗教的資質やウラマーと民衆に対する友好的態度が、都市防衛に際して民衆を軍事的に動員するという政治的役割を果たすものであったと指摘する<sup>(101)</sup>。たしかに都市防衛において民衆の軍事力は不可欠な要素であり、6/12—7/13世紀のダマスクスをめぐる攻防戦においては、正規軍 *jund*, 'askar とともに都市民衆が戦闘に加わり重要な役割を果たしていた。それは、史料によってアフダース *aḥdāth*, 義勇軍 *muṭṭawwi'a*, *mutaṭawwi'a*, 歩兵 *rajjāla* など様々な形で表現され<sup>(102)</sup>、また法学

者 faqīh やスーフィーが遠征に参加した例もみられる<sup>(103)</sup>。

ここで注目されることは、クダーマ家の人間の遠征参加がしばしばみられることである。アブー・ウマルは、サラディンのイェルサレム攻囲（583/1187年）に、弟のムワッファク・アッディーンや一族 jamā'a の者とともに同行した<sup>(104)</sup>。また、アブー・ウマルの子 Shams al-Dīn 'Abd al-Raḥmān（682/1283没）もしばしば攻囲戦 futūḥāt に加わり<sup>(105)</sup>、孫の大カーディー Najm al-Dīn Aḥmad（689/1290没）は、688/1289年のスルターン・カラーウン（在位678/1279—689/1290）の率いる対十字軍トリポリ遠征に、パレスティナ人 al-Maqādisa の一団とともに義勇兵 muṭṭawwi'a として加わった<sup>(106)</sup>。彼らが実際に戦場でどのような役割を果たしたのかはこれらの記事からは知ることとはできない。しかし、アブー・ウマルについては、その伝記中に「ジハードを行い、サラディンとともに戦闘 ghazwāt に参加した<sup>(107)</sup>」と記されており、また Najm al-Dīn については、「馬に乗り、剣を帯び、戦闘に参加した<sup>(108)</sup>」とあることから、実際に武器をとって戦闘に加わっていた可能性は強い。また両者が、一族の者や同郷のパレスティナ人とともに遠征に加わっていたことも、軍事集団としての参加であったことを示すものといえよう。そしてここでいうパレスティナ人とは、クダーマ家をはじめパレスティナからの移住者やその子孫をさすものとみられる<sup>(109)</sup>。

ムザッファル、ムアッザム、アシュラフの三人は、いずれも外交と軍事力によって自立を維持していく地方支配者の立場にあり、このような状況とクダーマ家が軍事集団としての性格をもっていたことを考えあわせれば、ムアッザムらの宗教的関心とハンバル派やサーリヒーヤとの結びつきが、政治的・軍事的意味あいを有した可能性は高いといえよう。すなわち、ムアッザムらの宗教的精神とクダーマ家の宗教活動は、政治にも直結するものであった。また両者の関係は、マムルークとウラマー、政治支配者と宗教指導者といういわば分業に基づく保護・協力関係というより、ハディースへの依拠や宗教的敬虔といった共通の精神に基づくものであり、サーリヒーヤのマドラサは、その結節点としての役割を果たしていたというこ

とができるであろう。同地のマドラサの約1/3 (10件) がムアッザムとアシュラフの統治した18年間に集中してつくられていること<sup>(110)</sup>は、このような結びつきがアイユーブ朝時代のサーリヒーヤの発展を支えるひとつの要因であったことを物語っている。

#### IV. む す び

サーリヒーヤは、ハンバル派のクダーマ家の移住に端を発し、その形成後は「ハンバル派の町」として知られていた。しかし、以上の検討で明かなように、同地はマドラサの数においても、またそこで活動した教授の数においても、ハンバル派は約1/4を占めるにすぎず、数の上ではハナフィー派が優勢であった。したがって同地の発展の原因や特徴をハンバル派だけに求めることは誤った理解といわざるをえない。サーリヒーヤの形成の特徴は、第一に、クダーマ家の移住時には未開の地にすぎなかったサーリヒーヤが、アイユーブ朝時代末までの約百年間に21のマドラサを擁する町へと急速に発展したことである。第二に、その担い手が、クダーマ家やハンバル派から、アイユーブ家のムアッザムや遠隔のイルビルのムザッファルなど幅広い層に広がっていったこと、第三に、そこでは、クダーマ家やハンバル派にみられる宗教的精神が、マムルークとウラマー、ハンバル派とハナフィー派といった階層や学派の違いをこえた共通の精神として大きな役割を果たしていたことが挙げられる。そして先の「ハンバル派の町」という表現は、現実のうえでのマドラサやウラマーや住民の帰属を示すものというより、サーリヒーヤがめざましい発展を遂げた草創期においてハンバル派が広い精神的意味をもっていたことを表したものと考えた方が、前述のような事実と矛盾なく理解できることになる<sup>(111)</sup>。イブン・トゥールーンのようなハナフィー派のウラマーが《サーリヒーヤの歴史》を著したことも、サーリヒーヤの歩みが一学派をこえた意味をもっていたことを示しているといえるであろう。

マムルーク朝時代のサーリヒーヤは、ダマスクス周辺はもとよりバクダードやカイロからも多くのウラマーを迎え、マドラサは各派

のウラマーの活動の中心となった。また、南郊のシャーグール、マイダーン・アルハサー Maydān al-Ḥaṣā などとともに政治的にも著しい成長をみせ、とくに末期においては地区を単位とした独自の政治行動を示し、ダマスカス全体の政治動向に大きくかわるようになった<sup>(112)</sup>。サーリヒーヤは、クダーマ家のような特殊な外来の小集団の活動が引き金となり、独自の性格をもつ都市が形成された例であるといえると同時に、ダマスカス全体が、クダーマ家やハンバル派のような外来の勢力を受け入れることによって成長をとげていたことも、この時代の都市の発展を考えるうえで見落してはならない点といえるであろう。本稿では、サーリヒーヤの基盤が築かれたアイユーブ朝時代を中心に論述することとなったが、このような成長を遂げたマムルーク朝時代のサーリヒーヤの社会のあり方やその変化については、稿を改めて検討する予定である。

## 註

- (1) Lapidus, I.M., *Muslim Cities in the Later Middle Ages*, Cambridge, Mass., 1967 及び第二版 (Student Edition, 1984) の序文を参照。なお Ziadeh, N.A., *Urban Life in Syria under the Early Mamluks*, Beirut, 1953, repr. Westport, 1970 も同様の趣旨の研究といえる。
- (2) 最も早く形成されたとみられるのは、サギール門の南の al-Shāghūr, ジャービヤ門の南の Qaṣr al-Ḥajjāj, ファラーディス門の北の al-'Uqayba の三地区で、6/12世紀前半にその名がみられる (*al-Qalānīsī*, p. 213, p. 256 など)。cf. Ziadeh, *ibid.*, pp. 81—82; *EI*<sup>n</sup>, s.v. DIMASHQ (II, pp. 282—283)。
- (3) ジャーミー jāmi' は、金曜日の集団礼拝が行われる大モスクで、他のモスク masjid と異なり都市住民の共同体的結束が示される場であり、11世紀以降、大都市では地区や法学派ごとにジャーミーがつくられた。cf. Lapidus, I.M., *Muslim Cities and Islamic Societies*, I.M. Lapidus ed., *Middle Eastern Cities*, Berkeley, 1969, pp. 69—73, pp. 78—79。
- (4) ウマリーヤ学院をさすとみられる。



- (5) *Rihla Ibn Battūta*, p. 101; Gibb, H.A.R., *The Travels of Ibn Battūta*, 3 vols., Cambridge, 1958—71, I, pp. 144—145. このほか al-'Umari (749/1349 没) の地誌もサーリヒーヤを都市 *madina* として扱い (al-'Umari, *Masālik al-abṣār fī mamālik al-amṣār*; *Mamālik Miṣr wal-Shām wal-Ḥijāz wal-Yaman*, Ayman Fu'ād Sayyid ed., al-Qāhira, 1985, pp. 113—114), Yāqūt (626/1229 没) も同地の住民はハンバル派のもとにあると述べている (*Yāqūt*, III, p. 390)。
- (6) 郊外 (市外) の発展を示すひとつの指標として、マムルーク朝初期の Ibn Shaddād (684/1285 没) の地誌に列挙された建築施設の数を挙げれば、モスクが市内434, 市外226, マドラサが市内60, 市外26となっている (*A'lāq-Dimashq*, pp. 92—166, pp. 199—266)。
- (7) アイユーブ朝・マムルーク朝時代を扱った概括的な都市史としては, Sauvaget, J., *Alep*, Paris, 1941; Muḥammad Aḥmad Dahmān, *Wulāt Dimashq fī 'ahd al-mamālik*, Dimashq, 1981; al-Karam Ḥasan al-'Ulbi, *Dimashq bayna 'aṣr al-mamālik wal-'Uthmāniyyina*, Dimashq, 1982などが挙げられるが, 本稿のような関心に応えるものではない。サーリヒーヤについては, Lapidus, Ziadēh らの前掲書においても部分的な言及はみられるものの, 事実にそぐわない記述もあり, 現在のところまとまった研究はなされていない。
- (8) cf. *Kawākib*, I, p. 133; *Shadharāt*, VIII, p. 43; *Thimār*, pp. 9—14.
- (9) アブド・アルハーディー家の先祖 Yūsuf はクダーマ家のシャイフ・アフマドの兄弟に当る。
- (10) 生涯については, 自伝 *al-Fulk al-mashhūn fī aḥwāl Muḥammad b. Ṭulūn*, Dimashq, 1348 A.H. が詳しい。cf. *Kawākib*, II, pp. 52—54; *Shadharāt*, VIII, pp. 298—299; *Qalā'id*, pp. ix—xx; *EI*<sup>n</sup>, s.v. IBN ṬULŪN.
- (11) 同書の執筆時期は, 946年9月/1540年1・2月の記事 (*Qalā'id*, p. 378) を含むことから, オスマン朝時代に入った晩年のものとみられる。なお現存写本は, 第4章から第9章冒頭及び第23章中程から第32章の部分欠く。
- (12) cf. al-Murādi, *Silk al-durar fī a'yān al-qarn al-thāni 'ashar*, 4 vols., Baghdād, 1301 A.H., IV, pp. 85—86. 及び *Murūj* の校訂者の解説を参照。
- (13) イブン・キンナーンの時代には, *al-Ṣālihiya* の稿本はすでにひどく破損していたため, 彼は他の史料や自身の時代の知見を加えて *Murūj* を編んだ。このため時代の異なる史料の混入もあり, 利用上の注意を要

する。

- (14) *Qalā'id*, pp. 24—26; *Ibn Rajab*, II, p. 52.
- (15) *Yāqūt*, II, pp. 159—160.
- (16) クダーマ家のシャイフ・アフマドの孫。cf. *Qalā'id*, pp. 76—78.  
*Qalā'id* の校訂者 Dahmān によれば、父母などから伝え聞いた話をもとにクダーマ家とその移住にかかわる著作を残したという (*Qalā'id*, pp. 6—8)。
- (17) フランスの子爵 Ibelin 家の Baudouin をさすとみられる (Sivan, E., *Réfugiés syro-palestiniens au temps des Croisades*, *REI*, tome 35, 1967, p. 138)。
- (18) cf. *Ibn Rajab*, II, pp. 52—61; *Qalā'id*, pp. 165—166.
- (19) 以上, *Qalā'id*, pp. 26—31 に拠る。なお, *Yāqūt* はサーリヒーヤの住民をエルサレムからの移民とする (*Yāqūt*, III, p. 390) が誤りである。
- (20) *Qalā'id*, p. 28.
- (21) *ibid.*, p. 28.
- (22) *ibid.*, pp. 31—34.
- (23) *al-Qalānisi*, p. 327; *Bidāya*, XII, p. 231.
- (24) *al-Qalānisi*, pp. 297—299; *Bidāya*, XII, pp. 223—224.
- (25) *al-Qalānisi*, p. 337; *Bidāya*, XII, p. 231.
- (26) *Qalā'id*, p. 25, p. 34. 同モスクについては, *A 'lāq-Dimashq*, pp. 136—137 を参照。
- (27) *Qalā'id*, p. 36.
- (28) *Ibn Rajab*, II, p. 52; *Qalā'id*, p. 25.
- (29) *Ibn Rajab*, I, pp. 68—72; *Dāris*, II, pp. 65—66.
- (30) 本稿注 (88) を参照。
- (31) *Ibn Rajab*, I, p. 71.
- (32) クダーマ家を代表する学者で、とくに彼の法学書《*al-Mughnī*》は後世まで長く用いられた。cf. *Ibn Rajab*, II, pp. 133—149; *Qalā'id*, pp. 340—344; Laoust, H., *Le Précis de droit d'Ibn Qudāma*, Beyrouth, 1950, pp. ix—xLii; *EI*<sup>n</sup>, s.v. IBN QUDĀMA.
- (33) *Ibn Rajab*, I, p. 369; *Dāris*, II, p. 68.
- (34) Abū al-Faraj とは、名前と時代からハンバリ一家の al-Nāṣiḥ (634/1236没) を指すとみられる (*Ibn Rajab*, II, p. 193)。
- (35) *Qalā'id*, p. 36.
- (36) *ibid.*, pp. 25—26, pp. 34—35. 名を挙げられている病死者の数は35

名である。

- (37) *ibid.*, p. 36. クデーマ家の Muwaffaq al-Din の伝えた記事。
- (38) *Qalā'id*, pp. 25—26, p. 36.
- (39) 主な建物は、ハンバル派の修道院、ハウラーン修道院 Dayr al-Hawrānī, 古モスク al-Masjid al-'Atiq の三つで (*Qalā'id*, pp. 39—42), 住民としては *Murūj* に 8 家族の名が挙げられている (*Murūj*, p. 61)。
- (40) *Yāqūt*, IV, p. 295; *Rihla Ibn Jubayr*, pp. 273—277. cf. Sourdell-Thomine, J., Les anciens lieux de pèlerinage damacains d'après les sources arabes, *BEO*, tome 14, 1952—54, pp. 70—77. なお, Ibn Jubayr がカースイユーン山を訪れたのはクデーマ家のサーリヒーヤ移住後の 580/1184 年であるが, 同地区についての言及はみられない。
- (41) *Qalā'id*, pp. 47—48.
- (42) *Yāqūt*, IV, p. 295.
- (43) *Qalā'id*, p. 37.
- (44) *ibid.*, pp. 25—26; *Ibn Rajab*, II, p. 52.
- (45) 同修道院から修道士が立去ったあとの入居者の斡旋をしている (*Qalā'id*, p. 40)。
- (46) *Qalā'id*, p. 38.
- (47) *ibid.*, p. 25. 最も遅いものでは, ダマスクス移住 4 年後の 6 月まで アブー・サーリフ・モスクに住んだとの記事がある (*ibid.*, p. 35)。
- (48) *ibid.*, p. 39.
- (49) *ibid.*, p. 38, p. 168, p. 246. 古モスクは, のちに Masjid 'Izz al-Din とよばれた。
- (50) *ibid.*, p. 38.
- (51) *Ibn Rajab*, II, p. 61.
- (52) 同墓への参詣は, 腹痛や熱を取去る効力があり, ハッジ (巡礼) にも等しい意味をもつといわれた (*Qalā'id*, p. 420)。Maḥmūd al-'Adawī (1032/1622・3 没), *Kitāb al-ziyārāt*, Dimashq, 1956 には, クデーマ家の墓所などサーリヒーヤの参詣地が紹介されている (*ibid.*, pp. 26—27, pp. 30—34, p. 58 など)。
- (53) *Qalā'id*, pp. 378—381; *Murūj*, pp. 69—75.
- (54) *Bidāya*, XIII, p. 32. なお, *Dāris*, II, p. 435; *Murūj*, pp. 81—82 にも同記事の引用があるが, 文章の細部には相違もある。
- (55) *Bidāya* では Kūkūrī とあるが, Kūkubūrī (*Ibn Khallikān*, IV, p. 113) が正しい。
- (56) *Murūj*, p. 82.

- (57) *A' lāq-Dimashq*, p. 86.
- (58) *Qalā'id*, p. 84, p. 157; *Dāris*, II, p. 80, p. 112.
- (59) *A' lāq-Dimashq*, p. 86; *Dāris*, II, p. 436—438.
- (60) *A' lāq-Dimashq*, p. 86.
- (61) *Murūj*, p. 81 では、ジャーミーのワクフがハンバル派専用であるためこの名があると述べられている。
- (62) *Qalā'id*, p. 165; *Dāris*, II, p. 100; *Murūj*, p. 101.
- (63) *Murūj*, p. 81. 但し、ムカッヅミーヤ学院は、その創設者 Fakhr al-Dīn Ibn al-Muqaddam (正しくは 'Izz al-Dīn か) が597年に死亡しており、ここからムザッファリー・ジャーミーよりも早く建設されたことになるが、当初は単なる墓所であった可能性が高い (*Qalā'id*, pp. 140—141; *Dāris*, I, pp. 599—600)。
- (64) 推定は次の二つに基づく。第一は、699年4月/1300年1月にモンゴル軍がサーリヒーヤの大略奪を行い、住民約400人を殺害し、約4,000人を捕虜としたとされること (*Bidāya*, XIV, p. 8)。第二に、オスマン朝時代初期の戸籍調査でサーリヒーヤは610戸と記録され、一戸の平均家族数は5～7人と推定されること (Pascual, J.-P., *Damas à la fin du xvi<sup>e</sup> siècle*, tome 1, Damas, 1983, pp. 26—27)。
- (65) *Thimār* は31のハーラ名を (*Thimār*, pp. 145—158), *Murūj* はイブン・トゥールーン時代のものであるとして39の名を挙げている (*Murūj*, p. 34)。
- (66) この表は、*Qalā'id* の現存写本に欠落があるためサーリヒーヤの建築施設のすべてを網羅するものではない(公衆浴場の章も一部欠落有)。先行する *al-Ṣāliḥiyya* には、スーク (11例) やハーン (9例) などの名も挙げられている (*Murūj*, pp. 32—34)。
- (67) *Qalā'id*, p. 83; *Murūj*, p. 32.
- (68) *Thimār* の挙げる31の小街区 ḥāra のうち、ハーラ内のマドラサの名をもってよばれるものが9、ハーラ内にマドラサをもっているものが16を数える (*Thimār*, pp. 145—158)。またサーヒバ学院は、同名のハーラに製粉所 ṭāḥūn, 果樹園 bustān, 菜園 ḥākūra をワクフ財としてもっており (*Qalā'id*, p. 163; *Dāris*, II, p. 86), マドラサとハーラが密接な結びつきをもっていた例といえよう。
- (69) cf. Makdisi, G., *Muslim Institutions of Learning in Eleventh-Century Baghdad*, BSOAS, vol. 24, 1961; *ibid.*, *The Rise of Colleges*, Edinburgh, 1981; Tibawi, A.L., *Origin and Character of al-Madrasah*, BSOAS, vol. 25, 1962.

- (70) cf. Lapidus, I.M., Ayyūbid Religious Policy and the Development of the Schools of Law in Cairo, *Colloque international sur l'histoire du Caire*, Caire, 1974; Gilbert, J.E., Institutionalization of Muslim Scholarship and Professionalization of the 'Ulamā' in Medieval Damascus, *SI*, vol. 52, 1980; Nielsen, J.S., Sultan al-Zāhir Baybars and the Appointment of Four Chief Qāḍīs, 663/1265, *SI*, vol. 60, 1985.
- (71) ハディース学院は、ハディースの修得を目的とし特定の法学派には属さないともいわれ (cf. *EI*<sup>n</sup>, s.v. DĀR AL-ḤADĪTH), *Qalā'id*, *Dāris* ともにマドラサとは別の章を設けて扱っている。しかし、*Qalā'id* においてハディース学院とされるディヤーイーヤ、アーリマが、*Dāris* ではマドラサとして扱われているように、両者の区別は必ずしも明確ではなく、本稿では、これらをマドラサと総称して扱うことにする。
- (72) *Qalā'id* に独立の項目があるもの29 (ジャーミー付設のもの3を含む) に、同書に欠ける2つを *Dāris*, *Murūj* から補った。この数字は、*Qalā'id* が先行する史書と自身の実地検分に基づいて著されているだけに、サーリヒーヤのマドラサの総数を示すと考えられる。
- (73) ザンギー朝末のマドラサ数は28 (湯川武「6/12世紀のシリアにおけるマドラサの発展」『史学』第50巻, 1980年, pp. 349—352 に拠る), 684年没の Ibn Shaddād の時代のマドラサ数は86, Lapidus, *Muslim Cities*, Appendix B によれば658—684年のマドラサ建設数は6, 以上の三点からアイユーブ朝支配時代の建設数を  $86 - 6 - 28 = 52$  と推計した。なお、マムルーク朝時代の建設数も、Lapidus の同表に拠る。
- (74) アレッポの7/14世紀のマドラサの構成は、シャーフィイー 21, ハナフィー 22, 共通 1, マーリク 1, ハンバル 1 である (*A'lāq-Ḥalab*, pp. 96—121)。9/15世紀前半のカイロでも、シャーフィイー, ハナフィーの両派があわせて約2/3を占めた (*SEI*, p. 304)。
- (75) cf. Ziadeh, *ibid.*, pp. 171—172; *EI*<sup>n</sup>, s.v. AYYŪBIDS (I, p. 803), s.v. ḤANAFIYYA (III, p. 163)。
- (76) *Ibn Khallikān*, III, p. 494; Ibn al-Dawādārī, *Kanz al-durar wa-jāmi' al-ghurar*, vol. 7, al-Qāhira, 1972, p. 288; *Bidāya*, XIII, p. 121; *Dāris*, I, p. 583; *Qalā'id*, p. 143, p. 146.
- (77) *Qalā'id*, pp. 143—150; *Dāris*, I, pp. 579—587.
- (78) *Qalā'id*, p. 149; *Dāris*, I, p. 549.
- (79) *Qalā'id*, p. 154.
- (80) *ibid.*, p. 156—7; *Dāris*, II, pp. 79—80.

- (81) *Dāris*, II, pp. 29—126. 但し、アイユーブ家のアシュラフがサーリーヒヤに建設したアシュラフィーヤ・ハディース学院はここには含まれていない。
- (82) シリアにおけるハンバル派の展開については、次の論文を参照。  
Laoust, H., Le Hanbalisme sous le califat de Baghdad, *REI*, tome 27, 1959; *ibid.*, Le Hanbalisme sous les Mamlouks Bahrides, *REI*, tome 28, 1960.
- (83) *Dāris*, II, p. 64.
- (84) *ibid.*, II, pp. 86—87, pp. 114—120.
- (85) *Ibn Rajab*, I, p. 200.
- (86) *ibid.*, II, p. 9; *Qalā'id*, p. 321.
- (87) *Bidāya*, XIII, p. 91; *Dāris*, II, p. 393. D. Sourdel の研究によれば、このミフラーブの前でスルターン（ムアッザムをさすとみられる）のために祈るハンバル派のサークル ḥalqa が編成され、そのメンバー100人に対して喜捨 ṣadaqa が支給されることになっていた（Sourdel, D., Deux documents relatifs à la communauté Hanbalite de Damas, *BEO*, tome 25, 1972, pp. 142—149）。
- (88) 'Abd al-Wāḥid (*Ibn Rajab*, I, p. 68) → 'Abd al-Wahhāb (*Dāris*, II, p. 64) → Najm al-Dīn (*Ibn Rajab*, II, p. 68, 以上ハンバリ一家) → Muwaffaq al-Dīn (*Ibn Rajab*, II, p. 195, クデーマ家) → al-Nāṣiḥ (*ibid.*, II, p. 195, ハンバリ一家)。ムナッジャー家では, Ṣadr al-Dīn (657 没, *Dāris*, II, p. 86) など。
- (89) *Qalā'id*, p. 76; *Dāris*, II, p. 91.
- (90) *Qalā'id*, p. 84; *Dāris*, II, p. 112.
- (91) *Ibn Rajab*, I, pp. 369—370; *Dāris*, II, pp. 64—71. このほかクデーマ家の Muwaffaq al-Dīn が墓地として寄進した同山麓の al-Rawḍa には、同家をはじめアブド・アルハーディ一家、ムフリフ家などハンバル派の諸家の墓がつくられた (*Qalā'id*, pp. 447—450)。
- (92) *Ibn Khallikān*, IV, pp. 113—120.
- (93) *Ibn Khallikān*, III, pp. 494—496; *Bidāya*, XIII, p. 121; *Qalā'id*, pp. 143—144, 146—149. なお、598/1201—615/1218年は父アーディルの後見下にダマスクスの名目的な支配者の地位にあった (cf. Humphreys, R.S., *From Saladin to the Mongols*, New York, 1977, Chap. 4)。
- (94) *Ibn Khallikān*, V, pp. 330—336; *Qalā'id*, p. 95.
- (95) Humphreys, *ibid.*, Chap. 5 & 6 を参照。
- (96) 以上, *Ibn Khallikān*, III, pp. 494—495; *Bidāya*, XIII, p. 121; *Qalā'*

- 'id, pp. 143—144, pp. 146—147.
- (97) *Ibn Khallikān*, IV, p. 119.
- (98) *Ibn Khallikān*, V, p. 334; *Dāris*, I, p. 19, p. 47.
- (99) 本稿注 (87) 参照。このほかムザッファリー・ジャーミーへの出資者とみられる。
- (100) *Qalā'id*, p. 95; *Dāris*, I, p. 47.
- (101) Humphreys, *ibid.*, p. 189, p. 192.
- (102) アフダース (*al-Qalānisi*, pp. 298—299, p. 327 など); 義勇軍 (*ibid.*, p. 298, p. 340); 歩兵 (*ibid.*, p. 299, cf. Humphreys, *ibid.*, p. 235, p. 285).
- (103) *al-Qalānisi*, p. 340 (552年).
- (104) *Ibn Rajab*, II, p. 56. このときハンバリ一家の al-Nāṣiḥ も同行している (*Qalā'id*, p. 159; *Dāris*, II, p. 70).
- (105) *Ibn Rajab*, II, p. 305.
- (106) *Bidāya*, XIII, p. 313. cf. Laoust, *Hanbalisme-Bahrides*, p.9; Sivan, *ibid.*, p. 144.
- (107) *Ibn Rajab*, II, p. 56.
- (108) *ibid.*, II, p. 322.
- (109) クダーマ家などジャンマーイール村の出身者はイエルサレムに結びつけて al-Maqdisi (pl. al-Maqādisa) のニスバでもよばれた (*Yāqūt*, II, p. 160)。なお, D. Sourdel は, クダーマ家の 'Abd Allāh (629/1232 没) が, イエルサレムとナーブルスの同胞 aṣḥāb を訪れその近況を知らせた手紙を紹介し, 同家及びハンバル派の絆の強さを指摘している (Sourdel, *ibid.*, pp. 145—146, p. 150)。
- (110) 付表 1 の No. 4~6, No. 8~14。
- (111) サーリヒーヤ出身のイブン・アルミブラドは, 同地のモスク masjid のほとんどはハンバル派に属すると述べ, このあと 8 つのハンバル派以外の施設の名を挙げている (*Thimār*, p. 159)。そのうち 5 つはマドラサであり, また一般にマスジドを法学派で分けて考える習慣はなかったことから, ここでいうマスジドとはマドラサをさしているとも考えられる。しかしいずれにしても, サーリヒーヤのマスジドやマドラサについての客観的事実を記述したものと考えるにくい。なお, Lapidus は, サーリヒーヤはハンバル派に属していたとみる (*Muslim Cities*, p. 86)。
- (112) たとえば, 903/1497年の内戦において, シャーグールとサーリヒーヤはスルターン側, マイダーン・アルハサーは叛徒側について戦い, サーリヒーヤは叛徒側と独自の和平交渉を行い地区を防衛した (*Mufaḥkaha*, I, p. 188, p. 199)。

＜付表 1 サーリヒーヤのマドラサ＞

番号	マドラサ名	建設年	創設者	学派	教専/兼	授 q/q <sup>ac</sup>	出 Qa	典 Mu
1	al-Muqaddamiya (M)	597 以前	Ibn al-Muqaddam (アミール)	Hf	6/1	—	140	I-599
2	al-'Umarīya (M)	598 頃	Abū 'Umar (クダママ家)	Hn	*1 32/6	4/2	165	II-100
3	al-Jarkasīya (M)	608 以前	Jiharkas (アミール)	Hf	*2 1/0	—	135	I-496
4	al-Mu'aẓẓamiya (M)	621	al-Mu'aẓẓam (アイユープ家)	Hf	11/1	6/0	143	I-579
5	al-Shibliya (M)	623 以前	Shibl al-Dawla (宦官)	Hf	16/0	0/2	124	I-530
6	al-Māridāniya (J+M)	624	'Azīza (アイユープ家)	Hf	9/1	—	61	I-592
7	al-Rukniya (J+M)	625	Rukn al-Dīn (アミール)	Hf	*4 18/5	—	49	I-519
8	al-'Alamiya (M)	628	'Alam al-Dīn (アミール)	Hf	6/1	—	133	I-558
9	al-Ṣāhibā (M)	628	Rabī'a Khātūn (アイユープ家)	Hn	8/2	1/2	156	II-79
10	al-Bahnasiya (M)	628 前後	al-Majd al-Bahnasi (フズイール)	Sh	3/0	—	121	I-215
11	al-Ashrafiya (DĤ)	629 頃	al-Ashraf (アイユープ家)	Hn	9/2	0/7	95	I-47
12	al-Mayfuriya (M)	629	Fāṭima Khātūn (不明)	Hf	5/0	—	141	I-604
13	al-Qāhirīya (M)	631	al-Qāhir Ishāq (アイユープ家)	Hf	—	—	154	I-569
14	al-'Aziziya (M)	635	al-'Azīz (アイユープ家)	Hf	2/7	—	131	I-549
15	al-Badriya (M)	638	Badr al-Dīn Lu'lu' (アミール)	Hf	3/1	—	—	I-477
16	al-Atābekiya (M)	640 以前	Khātūn (アイユープ家)	Sh	23/0	0/11	102	I-129
								45



17	al-Diyā'iya (DH)	643 以前	Diya' al-Dm (クターマ家)	Hn	8/0	1/1	76	II-91	37
18	al-Diyā'iya (M)	643 以前	Diya' al-Dm Maḥsin (イマール)	Hn	0/2	—	164	II-99	—
19	al-'Alima (DH)	653 以前	al-'Alima (ハンバリ家)	Hn	1/1	—	84	II-112	39
20	al-Nāṣiriya (DH)	654	al-Nāṣir Yūsuf (アイユーブ家)	不明	5/2	—	88	I-115	43
21	al-Murshidiya (M)	654	Khadija Khātūn (アイユーブ家)	Hf	7/1	1/2	151	I-576	46
22	al-Yaghmurīya (M)	663 以前	Ibn Yaghmur (アミール)	Hf	2/0	1/0	138	I-649	—
23	al-Qaymarīya (M)	665 以前	al-Ḥasan al-Qaymarī (アミール)	Sh	14/1	0/4	—	I-441	46
24	al-Qalanisiya (DH)	729 以前	Ḥamza al-Qalanisī (ワズイール)	不明	—	—	85	I-96	46
25	al-Jamāliya (M)	748 以前	Jamāl al-Dīn (アミール)	Hf	2/0	1/1	155	I-488	—
26	al-As'artīya (DQ)	817	Khwājā Ibrāhīm (商人)	Sh	—	—	73	I-150	43
27	al-Āmidiya (M)	821 以前	不明	Hf	—	—	124	I-477	—
28	al-Dulāmiya (DQ)	847	Aḥmad Dulāma (商人)	不明	—	—	71	I-9	43
29	al-Nizāmiya (DH)	872 以前	Nizām al-Dīn (ムフリマ家)	Hn	—	—	87	—	41
30	al-Ḥajibiya (J+M)	872	Nāṣir al-Dīn (アミール)	Hf	1/0	—	52	I-501	41
31	al-Shirāziya (M)	不明	不明	Hn	1/0	—	165	—	44

193/34 15/32

(略号) M=Madrasa J=Jāmi' DH=Dār al-Ḥadīth DQ=Dar al-Qur'ān Hf=Ḥanafī Hn=Ḥanbal Sh=Shāfi'i  
 専=専任 兼=兼任 q=qāḍī qq=qāḍī al-quḍāt Qa=Qalā'id Mu=Murūī (註) \*1 内訳 Hn=19, Sh=10, Hf=2 Malik=1 \*2 Sh 派 \*3 うち1人はSh 派 \*4 うち4人はSh 派。歴代教授数はQalā'id に拠り, No.15, 23のみ  
 Dāris に拠る。q, qq は, 専任の教授のうち, カードイ一職に就いた者の数を示す。

<付表 2 マドラサの建設年代>

地 域 年 代	サーリヒーヤ	ダマスクス
600 以前	2 ( 6.5)	—
601-650	16 (51.6)	—
651-700	5 (16.1)	15 (23.8)
701-750	2 ( 6.5)	21 (33.3)
751-800	0 ( 0 )	8 (12.7)
801-850	3 ( 9.7)	9 (14.3)
851-900	2 ( 6.5)	8 (12.7)
901-922	0 ( 0 )	2 ( 3.2)
不 明	1 ( 3.2)	0
計	31	63

(註) カッコ内は百分比 (以下同)。ダマスクスの数はLapidus, *Muslim Cities*, Appendix Bによる (付表 3 も同じ)。

<付表 3 マドラサの創設者>

地 域 階 層	サーリヒーヤ	ダマスクス
マリク その親族 アミール	5 4 9 } 18 (58.1)	} 27 (42.9)
ウラマー	5 (16.1)	11 (17.5)
官 僚	2 ( 6.5)	4 ( 6.4)
商 人	2 ( 6.5)	14 (22.2)
不明他	4 (12.9)	7 (11.1)
計	31	63

<付表 4 マドラサと法学派>

地域 法学派	サーリ ヒーヤ	ダマスクス	
		7/14世紀	10/16世紀
シャーフィイー	4 (12.9)	36 (41.9)	63 (39.6)
ハナフィー	16 (51.6)	34 (39.5)	52 (32.7)
ハンバル	8 (25.8)	9 (10.5)	11 ( 6.9)
マーリク	0 ( 0 )	2 ( 2.3)	4 ( 2.5)
共 通	0 ( 0 )	3 (3.5)	0 ( 0 )
医 学 校	0 ( 0 )	2 (2.3)	3 (1.9)
不 明	3 (9.7)	0 ( 0 )	26 (16.4)
計	31	86	159

(註) ダマスクスの 7/14 世紀は *A'lāq-Dimashq* に、  
10/16 世紀は *Dāris* に名を挙げられた施設を集  
計したもの。

<付表 5 マドラサの法学派別教授数>

種 別 学 派	専 任	代理	兼任	計
シャーフィイー	51 (26.4)	5	5	61 (25.7)
ハナフィー	90 (46.6)	1	15	106 (44.7)
ハンバル	46 (23.8)	4	12	62 (26.2)
マーリク	1 ( 0.5)	0	0	1 ( 0.4)
不 明	5 ( 2.6)	0	2	7 ( 3.0)
計	193	10	34	237